

ホルヘ・ルイス・ボルヘス、アドルフォ・ビオイ=カサーレス

牛島信明・内田吉彦・斎藤博士訳

天国・地獄百科



訳者について

牛島信明（うじまのぶあき）

一九四〇年、大阪市に生まれる。東京外国語大学スペイン科卒業。現在、同大学助教授。

主な著訳書には、『スペイン・ハンドブック』（共著、三省堂、一九八二年）、『ボルヘスとわたし』（新潮社、一九七四年）、『ス』、『弓と豎琴』（国書刊行会、一九八〇年）、『フェンテス』『セルバンテスまたは読みの批判』（書肆風の薔薇、一九八二年）などがある。

内田吉彦（うちだよしひこ）

一九三七、大宮市に生まれる。東京外国語大学スペイン科卒業。現在、東海大学助教授。主な訳書には、『ギブソン』『ロルカ・スペインの死』（晶文社、一九七三年）、『ドノソ』『この日曜日』（筑摩書房、一九七六年）、『ガルシア・マルケス』『大佐に手紙は来ない』（集英社、一九七八年）、『ブイグ』『リタ・ヘイワースの背信』（国書刊行会、一九八〇年）などがある。

斎藤博士（さいとうひろし）

一九三九年、石巻市に生まれる。京都大学法文学部卒業。

主な著訳書には、『ドグラ・マグラの夢』（三一書房、一九七一年）、『ボルヘス十ビオイール・サールス』『プストス・ドメックのクロニクル』（国書刊行会、一九七七年）などがある。

天国・地獄百科

一九八二年一月三〇日初版第一刷印刷

一九八二年一月三〇日初版第一刷発行

著者——ホルヘ・ルイス・ボルヘス十ア
ドルフォ・ビオイール・サールス

訳者——牛島信明・内田吉彦・斎藤博士

発行者——鈴木 宏

発行所——株式会社 書肆風の薔薇

東京都千代田区神田駿河台三―七 荻野ビル4F

郵便番号一〇一 電話〇三―二九三―八九八二

振替東京五―一三七六四

印刷所——株式会社第一印刷所

製本所——株式会社美成社

定価——二〇〇円

発売所——株式会社星雲社

東京都千代田区神田錦町三―六 郵便番号一〇一

電話〇三―二九四―五八一八

ISBN 4-7952-7156-9

●乱丁・落丁本はお取りかえ致します。

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

天国・地獄百科

ホルヘ・ルイス・ボルヘス・アドルフ・ビオイ・カサーレス

牛島信明・内田吉彦・斎藤博士訳

書肆風の薔薇

本書は、

桑名一博、篠田一士、

清水徹、鼓直の編集による

アンドースの風叢書の一冊として
刊行された。

プロローグ

この本はわれわれが数年前に編んだ、もっと部厚くてより広範にわたる、そしておそらくは、さし必要ではない本をもとに編集し直したものである。前の本には、どこか放棄された図書館、あるいは非人称の古文書館といった趣があった。人類が書き残したあまたの聖なる書物のそれぞれが、われわれにかなりのページを遺してくれたのだ。幸いなことに、それは決して出版されることはなかった。

今日われわれを導いている規準は、以前の本の場合とは異なる。われわれは本質的なものを探求したが、それでも夢幻的なもの、迫真的なもの、逆説的なものをなおざりにすることはなかった。おそらくこの一編は、古来の天国と地獄にまつわる概念の展開をかいま見せてくれるであろう。スウェーデンボリ以降、人は魂の状態に思いをはせてきたが、賞罰のあり方に思いをめぐらすことはなかった。

このようなアンソロジーは必然的に不完全なものである。読者諸氏よ、おりおりの読書により、偶

然により、さらには誉れ高きあなたの博識によって、より一層おどかな天国が、そしてより一層厳正で残忍な地獄が、あなたの目の前に開示されますように。

J・L・B／A・B・C

ブエノスアイレス、一九五九年十二月二十七日。

私はアエneasではなく、

パウロでもあります

私にそんな資格があるうとは

私も他人も思っていない。

『神曲』地獄篇、第二歌

無償の愛を求めて

ジェレミー・テイラー（一六一三—一六六七）

ある時、フランスの聖王ルイ九世はシャルトルの司教イヴォを遣いにやったが、戻ったイヴォは国王にこう語った——道中、片方の手に松明^{たいまつ}を持ち、もう一方に水瓶をかかえた、しかつめらしくも毅然たる物腰の年かさ女に出逢いました。いかにも敬虔そうな、しかし愁いに満ちた彼女の顔が、同時に何か夢見るように輝いていましたので、私は彼女に、その両手のものが何を意味するのか、また、その火と水で何をしようとしているのか、と訊ねてみました。答えはこうでした——水は地獄の業火を消すため、火は天国を焼き払うためです。私は人々が神を、ただ神の愛ゆえに愛するようになって欲しいのです。

ソネット

作者不詳（十六世紀）

神よ 私があなたを愛するのは

あなたが約束される天国に惹かれてではない

また あなたの怒りを畏れるのは

あの恐ろしい地獄を想うからではない

私を動かすのは 主よ あなたの御姿

十字架にかけられ 嘲笑の的となった

傷だらけのあなたの御体であり

あなたの屈辱と死が 私を動かすのだ

つまるところ 私を動かすのは あなたへの愛

たとえ天国がなくともあなたを愛し

たとえ地獄がなくともあなたを畏れよう

あなたを愛するための理由など必要ではない

かりに今望んでいることが無になっても
私は変わりなくあなたを愛するであらう

ある聖女の祈り

アツタール『聖人たちの想い出』（十二世紀）

主よ、もし私が地獄に対する恐怖ゆえにあなたを崇めて^{あが}いるとしたら、地獄の業火で私を焼き給え。
また、もし私が天国に対する期待ゆえにあなたを崇めているとしたら、天国から私を追い出し給え。
しかし、私が無私の愛ゆえに、あなたを崇めているなら、あなたの不滅の美を私に拒み給うことな
れ。

天国の誘惑

バーナード・ショール『バーバラ少佐』（一九〇五）

私は天国の誘惑に打ち勝った。さあ、神から授かった務めを、それ自体のために果たそう。まさに

その務めを果たすようにと、神はわれわれを創り給うたのである。なぜなら、生命ある男と女だけが、その務めを果たすことができるからである。私が死んだ時こそ、債務者が私ではなくて神でありますように。

ある勇者の天国

ジョン・パニヤン『天路歷程』（二六七八）

聞くところによれば、〈真の勇者〉のところに召喚状が届き、それにははっきりとこう記しるされているという——「貴殿の瓶は噴水で壊れたり」。召喚状を受け取った彼は、友人たちを呼び集めて、いった——「私は父母のもとに行く。ここまで辿り着くのにずいぶん苦労したけれど、そのことを別に後悔してはいない。私の剣は私のあとを継いで巡礼をする者に、そして私の勇氣と技倆は、それらにふさわしい者に遺してゆこう。私は〈あの方〉のために闘あかしったことの傷跡だけを身につけて行くが、〈あの方〉は今こそ私に報いてくださるだろう」。

旅立ちの時が来ると、大勢の人が彼を岸辺まで送った。そして川に入ると、彼はいった——「死よ、汝の棘はどこにあるのだ？」また、川の最も深い所にやって来ると——「墓よ、汝の勝利はどこにあるのだ？」こうして彼は川を渡りきった。すると向こう岸で、すべてのラッパが鳴りわたり、彼を迎

え入れた。

ある兵士いわく

デイトレフ・フォン・リーリエンクローン『低湿地と高燥地』(一九〇四)

天国に行っても、時には戦争に、合戦に参加したいもんだなあ。

天国に優るもの

チャールズ・ラム『エリア随筆』(一八二三)

死の苦しみを和らげんがための隠喩はあるが、それだけでは十分ではない。私は、人生を永遠へと導いてゆくような、静かな潮の流れに身を任せることなどお断わりだし、不可避の運命もまっぴらだ。私はこの緑の大地、都会のたたずまいと田舎の風情、そして、えもいわれぬ田園の静寂と市街の甘美な安らぎを愛している。できることなら、ここにわが聖堂を建てたいものだ。そして、これ以上齢をとらず、私も友人たちも今のままで、若くもならず、金持ちにもならず、これより着飾ることもな

く生きていられたら、どんなによいことだろう。熟れた果実のように、墓に落ちるのはごめんだ。それゆえ私のものであるこの世界に起こるいかなる変化にも、私はどぎまぎし、狼狽してしまう。もつとも、わが守護神たちはとても深く根を張っているので、血を流してもしなければ、それらを根こぎにすることはできないが。とにかく、新たな状況は私をおびえさせる。太陽、青空、そよ風、ひとけ人氣のない小道、夏のバカンス、野の緑、血のしたたるような肉に新鮮な魚、友人たち、心のこもった杯、蠟燭の火、暖炉のそばでのおしゃべり、無邪気な虚栄、冗談、そして反語法、アイロニーこれらはすべて死と共に消え去ってしまうのだらうか？そして、真夜中の私の楽しみたる書物たちよ、おまえたちも去ってしまうのか？おまえたちを抱きしめるあの歓喜までも諦めなければならないのだらうか？そして、こうしたことを知るのは、知りうるとすればの話だが、いやな直観の働きによるのであって、もはや読書というこの快い習慣によってではなくなるのだらうか？

わが天国

ミゲル・デ・ウナムーノ「抒情的ソネットのロサリオ」(一九一二)

進行する忘却の中で 私の宝を

星のもとに運んでゆく過ぎし日々よ

おまえたちは天上の合唱隊となり

私の永遠の住処の上で歌おうとするのか

ああ 生の神よ 私が希求するのは

ただひとつ 私の涙をさそうあの過去が

ついには私の周囲で楽の音となり

失われし幸福の慰めとならんこと

それは 新たな生を生きることではなく

私の願望が生きたものを再び生きること

私の翼が出発点に到達することなく

永遠の昨日に向かって飛び立ちますように

何故なら 神よ あなたの所有されるのは

私の大きな幸せに満ちた天国なのだから